**説教20230618ローマ5：6-11マタイ9：35-10：8「伝えたいこと」**

**「ただで受けたのだから、ただで与えなさい。」この今日のマタイ福音書の最後で、イエス様が言われた御言葉は、私の心に突き刺さりました。**

**私がこの御言葉を聞いて思い起こしたのは、５年ほど前に東京神学大学で学んでいた日々のことであります。そこでは、良い教授たちとの出会いがありました。この良いという意味は、創世記の始めに、「神は光を見て、良しとされた。」と書いてある処の、良いという意味です。神から良しとされる教授たちは、私たち学生に、良い知識や知恵や感性、そしてよい考え方や生き方を教えてくださいました。**

**この様に、学校と言うところは、良い教授が、学生に良いものごとを伝え、そこに良い学生が生まれ、やがてその学生が教える者となって、再び、次の世代の学生たちにもよい物事が伝わっていく。この様な世代を超えて良い物事が伝えられるところが学校と言うところなのだと思います。**

**そして、私が東京神学大学で実際に体験したところから語らせて頂ければ、よい物事は良ければよいほど、ただである、ということです。私は良い教授から、それまで埋もれていた価値を掘り起こすような興味ある論文の書き方を教えられました。又、良い教授から良い信仰の在り方と、善い行いの実りとを身をもって教わりました。**

**それで、今、思い返してみますと、良い教授は、これらの良い物事を私になぜ伝えたのかと言いますと、それは彼が、それらのことをどうしても伝えたかったから、としか言いようがありません。相手より少し前の世代に生きており、自分自身も又、先代の先生から、良いものを受け継いでいる、よき先生は、良いものを、値なしに、みかえりなしに、ただで、しかも次から次へと与えたがるのだなということを、私は身をもって体験することが出来たのです。**

**と言っても、学校と言うところが、学生が完全にただで学べる場所にはなっていないということも事実です。そういう意味では、よき物事も、完全にただではなく或る程度の対価を負担しながら、伝えられている訳ですが、ここに、私たちがこの世で働くということの、これまたよい意味が隠されているのではないでしょうか。**

**私たちは、この世で多くの場合、賃金を得るために働いていますが、やがてそうして得たお金の、良い使い道を考え始めることでしょう。そのお金をただ自分自身の飲み食いや娯楽のために使うのではなく、ある人は、愛する家族を養うためにお金を使い、或る人は愛する神学校のために、自分のお金を献金するかも知れません。**

**聖書に戻りますと、マタイ福音書9章 37節から、**

**そこで、弟子たちに言われた。「収穫は多いが、働き手が少ない。だから、収穫のために働き手を送ってくださるように、収穫の主に願いなさい。」**

**このイエス様の言葉に、私たちがこの世で働くというのはどういうことなのか、ということを知る上での、良い意味が隠されています。**

**イエス様は、この御言葉を、飼い主のいない羊のように弱り果て、打ちひしがれている群衆たちに、深い憐みをもって、お伝えになったのでした。**

**飼い主のいない羊のように弱り果て、打ちひしがれている群衆たちと言うのは、たとえば、先週の祈祷会で読みました詩編74編に出て来ます、アサフら神の民たちの姿が思い起こされます。紀元前586年の出来事ですが、この時、アサフらイスラエルの民たちは、自らの腐敗による内部崩壊と、バビロンの地からの、敵の来襲によって、神の宮とイスラエルと言う自分たちの国の滅亡と言う、計り知れない憂き目にあいました。それから神の民はバビロンの地に捕囚され、そのようにしてユダヤ人たちはこの地上の各地へと移り住むようにされたのです。**

**又、この飼い主のいない羊のように弱り果て、打ちひしがれている群衆たちと言うのは、今日のこの日本の地で、苦難に直面している私たち全員であるとも言えるでしょう。**

**聖書が、素晴らしい救いの書である理由は、今の様に私たちが実際に苦難の時代に直面した時も、イエス様の御言葉によって、その都度、具体的に救いの道が示されるということです。イエス様は、過去に起きたバビロン捕囚について全てを御存じの方であって、しかも、その苦難から、私たちが再び脱出する道をも、伝えていて下さっているのです。**

**さて、イエス様は「飼い主のいない羊のように弱り果て、打ちひしがれている」私たちを見て、「収穫は多いが、働き手が少ない。だから、収穫のために働き手を送ってくださるように、収穫の主に願いなさい。」と言われました。これはどういう意味でしょうか。先ず、イエス様が言われている、収穫とは、神の愛が実ると言うことです。神の愛が実っていく事によって、今、「飼い主のいない羊のように弱り果て、打ちひしがれている」私たち自身がイエス様によって手を差し伸べられ立ち上がらされて、強められ、元気に生きる者へと変えられます。これは素晴らしい良い収穫です。ここでいう収穫と言うのは、今弱められ打ちひしがれている私たち全員のことなのです。この様にたくさんの収穫物が目の前にありますが、働き手が少ない、と、イエス様は言われます。働き手と言うのは、そのイエス様の御業に従って、イエス様をリーダーとして実際にこの世で手足を使って働く者たちのことであります。具体的に言えばそれは牧師でありましょう。確かに、今の時代、牧師が足りていません。**

**牧師も牧師になる前は信徒でありました。「飼い主のいない羊のように弱り果て、打ちひしがれていた」一信徒が、どうしてやがて、飼い主である牧師として建てられていくのかは、本当に人それぞれの物語があります。が、そこには常に、人から人へ、良い知識や知恵や、感性、そしてよい考え方や生き方がただで伝えられたということがあるように思います。**

**「本当に大切なものは目に見えない」（１コリ4：18）と聖書には記されていますけれども、本当に大切なもの、良いものには、実は値札はついてはいないのです。**

**イエス様は十二人の弟子を呼び寄せ、イエス様のことを伝える伝道者とされましたが、その弟子たちの名前が明記されています。十二使徒の名は次のとおりである。まずペトロと呼ばれるシモンとその兄弟アンデレ、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネ、フィリポとバルトロマイ、トマスと徴税人のマタイ、アルファイの子ヤコブとタダイ、熱心党のシモン、それにイエスを裏切ったイスカリオテのユダ。**

**あの裏切り者のユダも当初は伝道者として名を連ねていたということは、驚くべきことでありますが、私たちはこの事実から人間が不完全な者であり、悪くもなりうるものだということを知らされます。**

**これらの１２使徒たちが個性豊かな人たちであったということは、有名な事ですが、良い伝道者と言うのは、やはりイエス様が言われる次のことを一様に行おうとしていることでしょう。**

**マタイ福音書 10章 08節**

**病人をいやし、死者を生き返らせ、重い皮膚病を患っている人を清くし、悪霊を追い払いなさい。ただで受けたのだから、ただで与えなさい。**

**ここでイエス様は、悪霊を追い払いなさいと言われています。悪霊を追い払う最も効果的な方法、と言うのは私たちが聖霊に満たされることです。この礼拝においても私たちは最初のほうで、聖霊よお越しくださいと言ってお祈りいたしますが、聖霊の神は、私たちが心をそちらに向けないで、心が定まらないで、他のことに気が紛れていますと、さっさと私たちの処から通り抜けて行ってしまわれるという、風のような性質が確かにおありなのです。**

**悪霊に取り付かれたような振舞いと言うのは、聖霊のいないところに忍び寄って参ります。悪霊の仕業を具体的に描写している有名な聖書箇所に次の箇所があります。**

**マルコによる福音書5章 1節以下お読みします。**

**一行は、湖の向こう岸にあるゲラサ人の地方に着いた。**

**イエスが舟から上がられるとすぐに、汚れた霊に取りつかれた人が墓場からやって来た。**

**この人は墓場を住まいとしており、もはやだれも、鎖を用いてさえつなぎとめておくことはできなかった。これまでにも度々足枷や鎖で縛られたが、鎖は引きちぎり足枷は砕いてしまい、だれも彼を縛っておくことはできなかったのである。**

**彼は昼も夜も墓場や山で叫んだり、石で自分を打ちたたいたりしていた。**

**イエスを遠くから見ると、走り寄ってひれ伏し、大声で叫んだ。「いと高き神の子イエス、かまわないでくれ。後生だから、苦しめないでほしい。」**

**イエスが、「汚れた霊、この人から出て行け」と言われたからである。**

**そこで、イエスが、「名は何というのか」とお尋ねになると、「名はレギオン。大勢だから」と言った。そして、自分たちをこの地方から追い出さないようにと、イエスにしきりに願った。**

**この後、この男から、汚れた霊どもが出て行って、豚の中に入って、その豚たちは崖を下って湖になだれ込み、湖の中で次々とおぼれ死んだと記されています。それでこの男は汚れた霊から解放されて正気になって座っていたのですが、この成り行きを見ていた、周りの人たちは、かえって恐ろしくなって、イエス様に、その処から出て行ってほしいと申し出たのでした。**

**なんだか今の世で身につまされる成り行きであります。**

**私たちはたとえ伝道者として召されたとしても、自分自身は飼い主のいない羊のように弱り果て、打ちひしがれている群衆の一人に過ぎません。伝道者は、かえってイエス様の前に、自分自身が全く無力であり、弱くて落ち込みやすい一個の人間であることをより深く悟らされている者たちであります。**

**では、その弱くて落ち込みやすい私たち、伝道のために働く者たちの力は、どこから来るのでしょうか。それは言うまでもなく、私たちがいつも憐れみを求めて共に歩んでいますイエス様から頂いているのです。**

**私たちは、イエス様が共にいて下さらなければ、伝道する言葉の一つも発することは出来ません。私たちがただで隣り人達に述べ伝えている御言葉は、私たちのすぐそばにいるイエスさまからその都度、聞かされている御言葉そのままなのです。私たちは、イエス様と共に歩んでいないならば、一言も伝道の言葉を口にすることが出来ないのです。**

**ローマの信徒への手紙/ 5章 9節以下**

**それで今や、わたしたちはキリストの血によって義とされたのですから、キリストによって神の怒りから救われるのは、なおさらのことです。**

**敵であったときでさえ、御子の死によって神と和解させていただいたのであれば、和解させていただいた今は、御子の命によって救われるのはなおさらです。**

**ここでいう神と和解するというのは、言葉を換えれば、キリストと私とが一つとされるということであります。パウロは、私たちが洗礼を受けたことによって、キリストと一つとされ、復活の命にあずかる者とされたという事実を次の様に語っています。**

**コリントの信徒への手紙一 15章 2節以下**

**どんな言葉でわたしが福音を告げ知らせたか、しっかり覚えていれば、あなたがたはこの福音によって救われます。さもないと、あなたがたが信じたこと自体が、無駄になってしまうでしょう。**

**最も大切なこととしてわたしがあなたがたに伝えたのは、わたしも受けたものです。すなわち、キリストが、聖書に書いてあるとおりわたしたちの罪のために死んだこと、**

**葬られたこと、また、聖書に書いてあるとおり三日目に復活したこと、**

**ケファに現れ、その後十二人に現れたことです。**

**この様にパウロは、キリストと一つとなって、福音を伝道しました。パウロはわざと自慢げに「わたしは他のすべての使徒よりずっと多く働きました。」と語っていますが、これは彼がほんとうに言いたかったことではありません。「しかし、働いたのは、実はわたしではなく、わたしと共にある神の恵みなのです。」このことこそパウロが本当に言いたかったことです。私たちは、自分に縛られ、みかえりを期待していては、決してイエス様の御言葉を伝えることが出来ないのです。**

**どうかこの一週間も、祈りながら、主の御前によしとされる行いを続けて参りましょう。**

**祈り**

**父なる神よ、あなたは御子イエスをこの地上に送り、復活の命を与えられ、御子を信じて共に歩む者に、計り知れない恵みを与えていて下さいます。命の与え主であるあなたに、感謝と賛美を捧げます。**

**御子イエスと共に歩む道は、苦しい時の慰め、絶望の時の救い、喜びの時の分かち合い、天に昇る時の喜びです。どうか、私たちがどこにいても又どんな時も、あなたから離れることなく、その道を確かにし、祝し守って下さい。**

**主御自身が建ててくださるのでなければ、家を建てる人の労苦はむなしい。主よどうかこの世の全ての仕事を祝福し、守り、豊かに実らせて下さい。なにもなすにしても、常にあなたに祈り求め、私たちが良い働きに従事出来ますよう、いつも守り導いて下さい。**